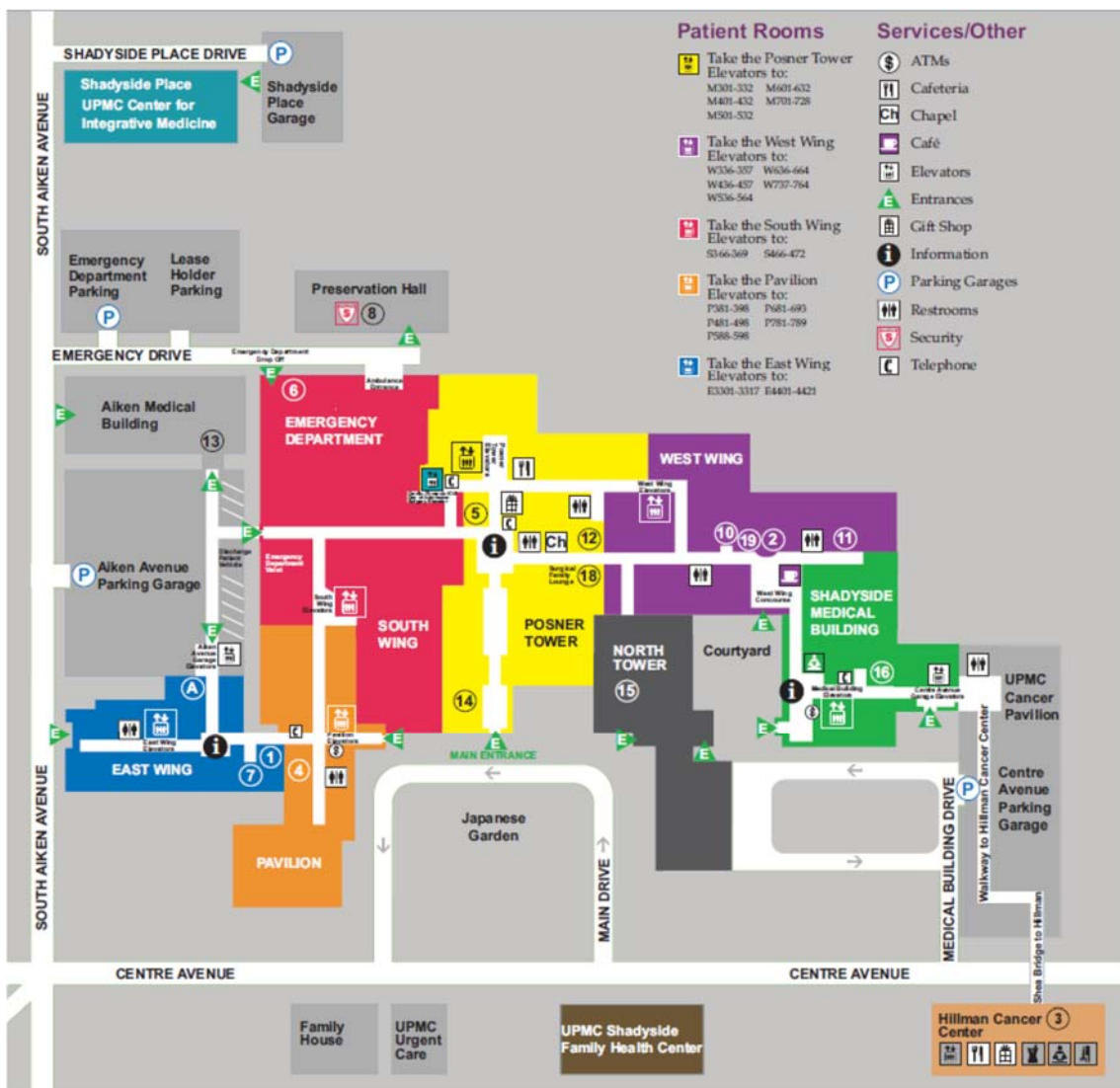


## UPMC Shadyside 個別計画実習 報告書

私は 2016 年 4 月 4 日(月)~2016 年 4 月 8 日(金)の期間に University of Pittsburgh Medical Center (UPMC) Shadyside Hospital にて Family medicine について学びました。これから私が実習を経て学んだことについて述べさせていただきます。

UPMC Shadyside は 520 床の病院で、病院本体の近くに Family Health Center (FHC) という外来診療を扱う施設や、がん治療の研究施設などを併設しています。私は Family Medicine についての実習を希望したので主に FHC や病棟の 3 階東の医局に居る時間が長かったです。



実習の大まかな流れは朝 7 時に 3 階東の医局に集合し、UPMC のレジデント(研修医)や指導医と共にカンファレンスに参加した後に入院患者の回診を行い、お昼休みを挟んで午後は FHC にて研修医による外来診察の様子を見学して 5 時ごろに解散といった感じでした。

曜日によっては午後に研修医レクチャーに参加する日や、UPMCの学外実習についての会議に参加する日もありました。これらの内容はほぼ英語で進んでいく為、聞き取れないことも多々ありましたが、そんな中でも学ぶことは多く、全体としては非常に有意義な実習だったと思います。これから入院病棟の見学と外来の見学に分けて内容について書いていきたいと思います。

まず入院患者の回診やカンファレンスについての報告です。まず、朝7時から始まる引継ぎカンファレンスではレジデントが担当患者についてショートプレゼンを行い、それについて他のレジデントらや指導医が活発に議論していました。ここでは指導医だけでなく他のレジデントも活発に議論に参加しており、非常にレジデントにとって教育的で有意義な時間だと感じました。カンファレンスの後、レジデントの先生方は気を抜くことなくカルテチェックを始め、それが終わり次第、指導医を含めたチームで回診を行っていました。こういった仕事の合間にはその作業に集中する働き方は見えて非常に効率的だと感じました。回診ではレジデントが前面に出てテキパキと患者さんに問診と身体診察を行っており、レジデントという段階にも関わらず円滑に診察をこなしていく姿を見て、UPMCのレジデントは学生時代に基礎的な臨床能力がしっかりと備わっているのだと感じさせられて、自分が一年後に同じことができるかと言われてもその自信が持てない程の手際の良さでした。また、入院患者は腹痛を訴える患者や、肩関節の痛みを訴える患者、静脈注射麻薬使用によるMRSA蜂窩織炎の患者、頬が大きく腫れ上がった耳下腺炎の患者、やせ細った周期性嘔吐症の患者などと多岐にわたり、アメリカにおける家庭医学の守備範囲の広さを実感しました。そして、入院時には原因不明であってもその患者のかかりつけの家庭医から必要な情報を聞き出しつつ、必要な時は専門科と密に連絡を取り合いながら診断を確定し、治療を行っていく様子もまた非常に効率的であるとも感じました。

次にFamily Health Centerにて外来を見学させていただいた時についてです。驚くべきことに、外来でのファーストタッチはほとんどレジデントに一任されており、一通りの問診と診察が終わった後に、担当の指導医に自らの診断と治療方針をプレゼンし、許可をもらえばレジデントが処方や医学的な指導を行っていました。私は最初に避妊治療の手技を見学しましたが、日本では産婦人科医でなければ行っていないであろう手技をレジデントが行っている様子を見て、アメリカでは家庭医学の範疇で婦人科の治療も行っているということを実感しました。その後も外来では小児健診、老人健診、妊婦健診、内分泌疾患の管理、生活習慣病の指導、精神疾患を持つ人へ問診と処方、腹痛や胸痛の鑑別などと本当に幅広い分野のプライマリケアを行っている様子を見学し、日本でもかかりつけの医師がこれだけ広い知識を持っていれば患者さんも安心でき、また頼りにすることができるのではないかと思います。これだけ広い分野の診察を行いながらも、その質は非常に高く、どのレジデントも理想的な診察を行えているのを見て、アメリカの臨床教育システムのレベルの高さを実感しました。また、その場で診察して終了ではなく、疾病の予防のために、患者さんへのアドバイスを欠かさず行っていたことも非常に印象に残っています。

その他にも水曜日の研修医レクチャーに参加した時には、前で講義している先生方にパワーポイントを使いながら非常に分かりやすく説明して頂いて、授業後にも確認の小テストを行ったり参加者同士で議論したりと学習しやすくするための工夫が凝らされているように感じました。

1週間という短い期間でしたが、アメリカの **Family Medicine** の入院と外来の様子を見学することができ、日本では経験することのできない貴重な1週間だったと思います。患者との距離が近く、そして乳児から老人までを診て、幅広く質の高いプライマリケアを提供する家庭医学という学問の素晴らしさを身に染みて学ぶことができました。これからは日本でも高齢化や過疎化などにより家庭医のような幅広い領域のプライマリケアを行える人材が求められるようになると思いますし、日本に帰ってもこの留学で学んだことを生かして、自分の理想とする医師になれるよう努力したいと思います。ここまで書いてきましたが、実際には他にも文章では伝えられない経験を味わうことができたので、ぜひ後輩の皆さんにも6年次での留学体験をして欲しいと思います。最後に、見学を受け入れて頂いた竹大禎一先生をはじめ、お世話になった皆様方にこの場で改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

神戸大学医学部医学科6年生

片上 隆史